



# 大工と鬼六

おにろく

## はじめに

みなさんは、「大工と鬼六」という、次のような話をご存知でしょうか。ある腕の良い大工が、とても流れた速い川に橋を架けることになりましたが、なかなか良い方法が浮かびません。悩んでいると、川から鬼が出てきて代わりに橋を架けてやろうと言いました。ただし、鬼の名前を当てないと、大工は目玉を取られてしまいます。鬼はすぐに橋を架けてしまい、さあ目玉をよこせと言いました。大工は逃げだして、あてもなく山をさまよっているとき、どこからか子守歌が聞こえてきました。「早く鬼六、目玉もってくるといいなあ」これを聞いた大工は、喜んで鬼に会いにゆき、「お前の名前は鬼六だ」というと、鬼はポッカリ姿を消してしまいました。

おおよそ、このような話ですが、



大工と鬼六(著者画)

昭和6年(1931)に出版された佐々木喜善の『聴耳草紙』に収録されたことにより注目され、さらに昭和23年(1948)に柳田國男の『日本昔話名彙』で「言葉の力」という話型に属する、日本の伝統的な昔話として認められました。しかし、実はこの話は日本古来の

ものではなく、北欧の昔話である女性が翻案したものだったのです。

## 翻案

「翻案」とは、文学作品を改作することですが、日本の昔話は中国の話を翻案したものがありますので、これ自体はさほど珍しいことではありません。しかし、「大工と鬼六」は比較的近年に翻案され、しかもヨーロッパの話がもととなっているにもかかわらず、専門家までが国産と間違えてしまったほど、完成度の高い作品でした。なおかつ、翻案者まで特定されるという珍しい事例となったのです。

## 「大工と鬼六」の原話

それでは、「大工と鬼六」の原話となった「オーラフ上人の寺院建築の伝説」を見てみましょう。オーラフ上人は熱烈なキリスト

いう。

ここに登場する「味噌買橋」は、岐阜県高山市の「筏橋」のことで、この橋のもとに角屋藤兵衛という味噌屋があり、人々が味噌を買いに渡った橋ということで「味噌買橋」と呼ばれていました。

## 小林幹の翻案

この「味噌買橋」の話は、やはり櫻井美紀によって昭和20年(1945)まで高山西小学校の教員を務めたその後、高山市郷土館長に就任した小林幹が、イギリスの「スワファムの行商人」をもとに翻案したものであると発表されました。

「味噌買橋」の「炭屋」を「行商人」、「豆腐屋」を「市民」、「味噌買橋」



高山の筏橋(味噌買橋)

教の宣伝者でした。彼はノルランドに寺院を建築しようとしたのですが、莫大な費用が必要だったので、なかなか叶いませんでした。悩みながら森の中を歩いていると、巨人が現れて寺院を建築してやろうと言いました。ただし、寺院が完成するまでに巨人の名前を当てないと、日と月、もしくは上人の身体を取られてしまいます。巨人は着々と工事をこなし、残りは頂上の尖閣のみとなりました。これを見て上人は大変困り、あてもなく森を歩きまわりました。すると、どこからか子どもの泣き声と子守唄が聞こえました。黙れ、黙れ、いとし児よ。明日は父なる「暴風雨」が、うまし土産を持ち帰る。日か月か、もしくは上人か。これを聞いた上人は大変喜び、いままさに尖閣を取り付けようとして

を「ロンドン橋」に変えれば、「スワファムの行商人」になります。小林は『世界童話大系・第七巻』に収録された「スワファムの行商人」に登場する場面や人物を身近なものに変えて地域の民話にしたのです。

## おわりに

もう一つ、「味噌買橋」に関する面白い話を櫻井は紹介しています。平成3年(1991)に刊行された『日南町の昔ばなし』に、鳥取の言葉で書かれた「味噌買橋」の類話が収録されていたので、櫻井が確かめるところ、編者が平成2年度の教科書に出していた「みそ買橋」を読み、郷里でも聞いたような気がして、ふるさとの言葉で再話したものだと言ったといえます。

「大工と鬼六」や「味噌買橋」、また最後の『日南町の昔ばなし』に収録された「味噌買橋」の類話は、櫻井によって翻案者の存在が確かめられました。日本には津々浦々に弘法大師の奇跡など、同じような伝説が語られています。櫻井の研究は、これらがその土地土地で個別に生まれ育ったものではなく、どこからか流れてきた話を根付かせた者がいたことを、実例をもって示唆したという意味で、口承文芸の研究に大きな業績を残したといえるでしょう。(文：江口知秀)

している巨人に向かって「お前の名前は暴風雨だ」と叫ぶと、巨人は転げ落ちて微塵に砕けてしまいました。いかがでしょうか。「オーラフ上人」を「大工」、「寺院」を「橋」、「巨人」を「鬼」、「日と月、もしくは上人」を「目玉」に変えれば、だいたい同じ話になることがお分かりいただけると思います。

## 水田光の「鬼の橋」

この「大工と鬼六」が、水田光という童話研究家の翻案作品であることをつきとめたのは、やはり童話研究者であり語り手でもある櫻井美紀でした。櫻井の実家は、水田の嫁ぎ先と懇意であったことから、水田の創作活動に関する調査を行った結果、大正6年(1917)に水田が刊行した『お話の実際』に、「鬼の橋」という「大工と鬼六」とモチーフを同じくする話が収録され、そこに翻案の顛末が水田自身の手によって書かれていたのです。

すなわち、寺院建築から橋の架橋に変えたのは、「オーラフ上人は」宗教伝説としてはなかなか面白いのではありませんが、如何せん、児童の心には、未だ宗教的意識が発達していませんから、この話を全然その儘の形で採り入れるわけにゆきません」として、日本の子どもが受け入れやすいように変えたといえます。

また鬼が要求する目玉については、「オーラフ上人のような高僧に対しては、日や月を要求しても、さして奇怪にも思われませんが、ただ一介の大工にこういう要求を持ち出すのは、甚だ不似合いです。鬼は巨人ほどの巨漢ではないので、目玉の方が玩具じみて面白く思いましたから」と述べています。

巨人を鬼にしたことについては、特に触れていませんが、もともと鬼は大工や鍛冶と関係があるといわれており、日本の有名な魔物の中では力仕事に適した偉丈夫なので登場させたと思われれます。

## 味噌買橋

もう一つ、「大工と鬼六」と同じような出自の「味噌買橋」をご紹介します。むかし丹生川の澤上の長吉という正直な炭焼きが夢を見た。高山の味噌買橋に行けば良い事があるという早速、橋の上に立っていると、橋のたもと豆腐屋が、何をしているとたずねてきた。長吉の話を聞くと、豆腐屋は「夢を真に受けるとは馬鹿なことだ。わしはこの前から澤上の長吉の屋敷の杉の下に、金銀が埋まっているという夢を見るけれども、まったく下らない」と言った。長吉はそれを聞いて急いで帰り、家の杉の下を掘って、大金持ちになったと